柿生文化

柿生郷土史料館　情報・研究誌
住所：川崎市麻生区上麻生 6-40-1
柿生中学校内
電話：070-1503-6401、044-988-0004
http://web-asao.jp/hp2/k-kyoudo
第 92 号

新年 明けましておめでとうございます。
本年もよろしくお願い申しあげます。

今年、平成 28 年(西暦 2016 年)は、中国の古い時代の思想では、丙申(ヘイシン=ひのえさる)の年と言われています。「丙(ヘイ=ひのえ)」は「火」を表し、何事も明らかになり、それも「陽」という力強いパワーを持って動きます。「申(シン=さる)」は本来、動物の猿の意味ではなく、草木の果実が成熟し、種が固まってくる様子を表しています。したがって平成 28 年は、物事の気が熟し、将来への新たな力が蓄積される年といってよいでしょう。ただし「丙」の字の持つパワーがマイナス方向に向かない事を願っております。

歴史的にも「庚申」の年を辿ってみますと、1596 年(慶長元年)7 月 13 日に近畿地方で大地震が発生、伏見城が崩壊しました。更に同年 9 月 2 日、豊臣秀吉は明国制圧のため朝鮮に出兵を決定し 12 月 19 日には長崎でキリシタンの大弾圧が行われました。1836 年(天保 7 年)には全国的に大飢饉が発生し多くの死者が出、一揆・打ち壊しが多発しました。また、1896 年(明治 29 年)6 月 15 日、岩手県三陸沖で発生した大地震で起きた津波で 2 万 7000 人もの死者が出ました。過去の丙申の年はなかなか大変な事件の多い年であったようです。

なお、十二支の動物の名称は、後世、中国の王朝が一般庶民にも分かり易いようにと「子(シ)→(鼠)」「丑(チュウ)→(牛)」「寅(イン)→(虎)」などと文字に動物の名を当てはめ、覚えやすいようにしたものです。

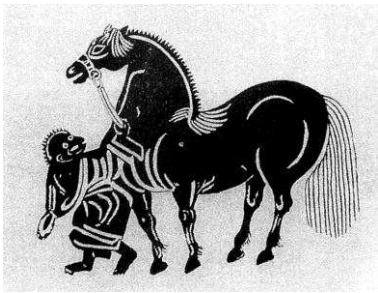
さて、昨年、2015 年(平成 27 年)はどんな年だったのでしょうか。振り返ってみましょう。正月気分もまだ抜けきっていない 1 月 8 日の新聞の一面には、こんな記事が大きく掲載されていました。フランスパリ市内の風刺画週刊誌「シャルリー・エブド」本社に武装犯が侵入し、警官・編集長・風刺漫画担当記者の計 12 名を殺害。犯人はイスラム系国際テロ組織アルカイダを名乗る者で「ムハマンド(イスラム教の予言者)への侮辱に報復した」とのこと。そして、ついこの前、2015 年も終わりに近い 11 月 13 日、同じくパリ市内及びその周辺の市街で発生した同時多発テロは、約 130 人の犠牲者を出しました。これもイスラム系の過激派組織 IS の犯行とのこと。昨年一年間、これらテロの話題で持ちきりでした。

昔、国際政治学者が、21 世紀の世界を予言していた言葉を思い出します。「21 世紀はキリスト教世界とイスラム教世界の対立が重要な課題になる」と、まさにその通りになってしまいました。

正月早々物騒な話ばかりで誠に恐縮ですが、これらの問題点の一つとして、相互の文化、あるいは考え方の相違があります。互いにそれぞれの文化の違いを理解しようとしないという問題と歴史上のしこりがまだ、十分に解決していません。絡まった紐を丁寧にほぐしていかないことには解決の糸口が見つからないと思います。なにとぞ 2016 年(平成 28 年)は、互いに胸襟を開き、理解し合い、和解の方向に進んでいけたらと、心より願っております。

（写真Ａ）子ノ神社の庚申塔

さて、冒頭にも書きましたが、今年は「申(サル=猿)」年です。日本では昔から人と猿の深い関係がありました。8 世紀の奈良時代に編纂された「古事記」の中には「天上に居る天照大神(あまてらすおおみかみ)から日本建国を命じられて、瓊瓊杵尊(ににぎのみこと)が地上に降りる際、猿田彦神が道案内をして無事に高千穂峰に降り立つことができた」と記しています。ここに猿を擬人化した存在としての猿田彦の神が登場します。日本神話にある日本創世の重要な役割を果たしているわけです。ここから派生して、猿が道を照らして先導した故事から道を守る道祖神の信仰にもつながっていきます。さらには「庚申」の「申」を「さる」と訓ずることから庚申信仰にもつながっていきます。庚申信仰とは、中国の道教の影響を受けたもので、人間の体内にいる三尸(さんし)という虫が庚申の日の夜に体内から抜け出し、その人の罪科を、生死を司る天帝に告げ口するそうです。ですから、この日の夜は皆、寝ずに徹夜して三尸が体内から出ることを防ごうとしました。このような信仰は日本に古くからあった「お日待ち」とも関係して江戸時代には全国的にも広がりを見せます。庚申塔はこの当時の作が多く、石塔には三尸を退治する青面金剛(しょうめんこんごう)や猿田彦大神・三猿像(見ざる・聞かざる・言わざる の表情をした 3 匹の猿の像で天帝に自分の罪科が伝わらないようにした、まじない)の肖像が描かれています。麻生区でも、多くの庚申塔が見られます。早野の子ノ神社に祀られている 3 体の庚申塔には青面金剛の下に「見ざる・聞かざる・言わざる」の三猿像が居ることが分かります。(写真 A)



（写真Ｂ）猿駒引き絵札

また、猿は「厩(うまや=馬を飼う小屋)」を守護するという信仰が昔からあり、現在でも猿が馬を引く絵を守り札として厩に貼る習慣があります。(写真 B)

このように、猿はかなり古い時代から人間とのつながりが深く、神話の時代から人間や馬などの守護神として信仰の対象にもなってきました。きっと世界平和の道案内もやってくれることでしょう。今年がよい一年となりますように。

(文:板倉)

シリーズ
「麻生の歴史を探る」 第 62 話

麻生の寺院(12) 麻生不動

小島　一也（遺稿）

毎年 1 月 28 日、麻生区下麻生の周辺は「麻生不動のだるま市」で大変な賑わいになります。だが、この麻生不動の本当の名は「明王山般若坊不動院」。王禅寺の末寺で、またの名を「木賊（とくさ）不動」といい、室町時代、下麻生の村人が木賊の茂みの中から不動明王像を発見、火伏の信仰としたのがその始まりとされています。

不動明王とは火焔を背にして目玉を剥き、怒りの表情を物凄く顕した仏様で、人の災いの一切を救ってくださるとするもので、「木賊」は、今でもこの地方によくみられる「シダ科」の管状の茎を持つ、火にくべても燃えない常緑の多年草ですが、この麻生不動について新編武蔵風土記稿は、不動堂の欄で「村の乾（西北）にあり、五間に六間東向なり、不動は長さ八寸の立像なり、王禅寺村王禅寺の持」とのみ述べ、その縁起、木賊については記されておりません。王禅寺に残る文書には「寛政の頃（1790）下麻生村の願いで王禅寺の持となった」旨が記されているといい、その創立の年代、縁起については謎になっています。

地元伝承によると、このお不動様は応永年間（1400）鎌倉公方の庇護によって開かれたとされ、また一説にはこのご本尊は大山不動尊の開山願行上人が鎌倉二階堂覚園寺の像を三体一緒に造ったものとも言われ、調べてみると願行上人の不動創建は文永十一年（1264）で不動像は高さ約 1.7m余で鉄の鋳造。覚園寺は永仁四年（1296）知海上人の開山で、不動像のそれは「火焼（黒）地蔵」と呼ばれており、2m余の木像で、注目すべきはこの二体とも国の重要文化財（国宝）であることで、この大寺とともに麻生不動が伝承されていることは興味があるところです。

大正期の不動堂

現在の不動堂とだるま市

ちなみに、この麻生不動の草葺きのお堂（江戸中期建立と思われる）は、老朽化のため昭和 43 年 10 月再建されましたが、不動明王像（鉄鋳造高さ 8 寸）を祀る土蔵造りの内陣は堅固な造りで手を付けず不動像を安置したと言われています。

麻生不動の火伏の御利益は近郷近在に広がり講を作っていました。講とは信者の集まりですが、現在境内には津久井や相模、横浜などの講中が建立した記念碑があります。昔の人は朝早いほど御利益があると信じ、夜明けとともに霜柱を踏んでお詣りしたもので、本堂で穴あき銭(永楽銭・天保銭・寛永通宝など)を頂き、家に持って帰り竈(かまど)の柱や囲炉裏(いろり)の自在鍵に付け、一年が息災で終わると、その穴あき銭に新しい「穴あき銭」をつけてお返しし、また新しい「穴あき銭」を頂いてくる仕組みでしたが、永楽銭などの穴あき銭が全く姿を消した現在は、「麻生不動」と印した穴あき銭に似たものを鋳造していますが、その数は年に 8,000 個と言われています。

不動講中

この麻生不動に「だるま」が登場したのは明治 37 年(1904)、当時町田能ヶ谷の露天商池田巳之吉が北多摩郡の村山から「だるま」を仕入れ商ったのが最初とされます。巳之吉は農家兼業の露天商でしたが、江戸末期この地方には「揚屋(あげや)一家」と呼ぶ露天商の組合(後に王鶴)があり、その元締めは王禅寺の尾作清吉で、その配下の露天商は 65 人に及び巳之吉もその一員だったようです。大正年代になると地元下麻生の青年団が露天商と並んでダルマを商いましたが、当時農村は不況のどん底。しかし達磨大師の「七転び八起き」は養蚕の盛んなこの地方で、蚕が成長する一眠起き、二眠起き、三眠起きと絡んで格好の縁起物となりました。残り物には福、ということで、1 月 28 日を「関東納のだるま市」としたのは揚屋一家の裁量であり、今日の「麻生不動のだるま市」盛況の陰には地元王禅寺の揚屋一家の存在が大きかったのではないでしょうか。

前述のとおりこの麻生不動の信仰がいつ始まったかは分りません。だが、この地が室町時代「国領」と呼ばれ麻生郷の本郷であったことと無関係ではないと思います。現在この不動院は下麻生の信徒 13 名(家)と、王禅寺住職によって運営管理され、正・五・九と言って 1 月、5 月、9 月の 28 日には、下麻生信徒、講の代表、王禅寺住職によって火伏の護摩焚きが行われています。1 月 28 日は皆がよく知るところですが、5 月、9 月のそれはあまり知られていません。それにしても、火には便利な平成の世まで、不動信仰があることは驚くべきことです。

参考文献：「新編武蔵風土記稿」「川崎市史」「下麻生の歩み」「川崎市郷土資料」

シリーズ
時間と時計の話 第１部

和時計と西洋時計（7）

小林　基男（柿生郷土史料館専門委員）

◆和時計の誕生◆

話を戻しましょう。江戸時代前半は、一種の香時計によって時を計り、鐘や太鼓の時報を鳴らしていたことは、このシリーズの第５回に記しました。それが江戸時代も中期に入ると、和時計と呼ばれる日本独特の機械時計が考案され、利用されるようになっていったのです。

日本人は手先が器用なことで知られています。種子島に齎された鉄砲も、半世紀足らずで世界でも５指に入る鉄砲量産国になるほどに、短期間で自前の技術に作り替えてしまっています。戦国末期の日本は、世界でも有数の鉄砲量産国になっていたのです。日本の技術水準は、決して世界に引けをとってはいなかったのです。

そんな日本でしたから、西洋から入手した機械時計の技術もまた、独自の機械時計の製造に昇華させていったのです。それが和時計でした。しかしそこには、鉄砲生産とは違って、乗り越えなければならない、大変難しい問題がありました。西洋の機械時計は、昼夜の別も季節の別もなく、常に一定の時を刻んで人工の時間を創り出す、定時法の時計です。ところが和時計は、季節によって昼と夜の長さが異なる不定時法に適合した時計でなければなりません。日本の時刻制度に合うような改良が必要だったのです。当然、定時法の時計よりもはるかに難易度の高い時計でした。

不定時法では、昼と夜の長さが異なります。ですから、昼と夜とで１時間という単位時間の長さを変える必要がありました。さらに、四季を通じて昼の時間と夜の時間は日々変わってゆきます。日の出や日の入りの時間も日々変わってゆきます。こうした点も調整する必要がありました。

現代のハイテク技術をもってすれば、こうした難問の解決も難しくないのでしょうが、江戸時代にあって、こうした難問を解決するのは、さすがに無理でした。そこで、和時計を作り上げた技師たちは、時間の正確性をトコトン追及することを諦め、自然の時間に合う機械時計を創ることにしたのです。世界広しといえども、不定時法に適合する機械時計を創造したのは、日本だけでした。このことは、もっと誇りにして良いのではないでしょうか。

残念なのは、不定時法が明治６年（1873 年）１月に廃止され、定時法に変えられた結果、実用性を失った和時計は、技法の精密さに感銘を受けた西洋人によって買い集められ、そのほとんどが海外に流出してしまったことです。今では、国立博物館など、数少ない博物館が所有するだけになっているのではないでしょうか。どなたか個人のお宅でお持ちの方がいらっしゃるなら、教えていただけると幸いです。

和時計は、各地の有力大名や名門の大寺などが、金に糸目をつけずにお抱えの技師に作らせたものですから、夫々に特徴を持っていたのですが、おおまかにやぐら時計と尺時計に分けられます。やぐら時計の誕生が最も早く、17 世紀末の元禄時代中期に誕生しています。香時計に替わって、城下の時法装置と連動して、時を告げる役割を担ったのです。美術工芸品として藩主らの威光を示すとともに、実用の役も果たしていたのですね。

やぐら時計は、はかま型をした木製の台座の上に、四角い箱型の機械時計を据え付けた構造になっています。袴の形の台座の中には、時計の動力となる錘が下がっています。その錘が落下する速度を調節する役割を果たすのが分銅で、時を刻むテンプに繋がっています。このテンプが昼用と夜用の２本付けられていた時計が、「二挺テンプ式和時計」と呼ばれた時計です。昼用のテンプと夜用のテンプが、明け六つと暮れ六つで自動的に切り替わるので、分銅を毎日移動する必要がなく、半月ごとに分銅を動かせばよい優れ物でした。17 世紀末～18 世紀の日本で、最も進んだ時計言われていた時計です。

尺時計は、東京オリンピックの頃まで、一般の家庭で広く使われていた短冊形の掛時計に、良く似た形の時計でした。この時計は、構造的には簡単な仕組みで、動力が錘である点は、やぐら時計と同じでした。異なっているのは、錘が垂直に落下してゆく際に、錘に取り付けられている針が、時刻を示す文字盤を通過することです。その時に、針が示す記号によって、時刻を知るのです。それゆえ、この尺時計の工夫は、文字盤を季節ごとに、あるいは１ヶ月ごとにといった目安で、何枚も取り換えることが出来るようになっていたことでした。錘の落下速度は一定ですから、こうすることで、１年中の時刻の調整をしていたのです。

尺時計の錘は、やぐら時計と違って一つでしたから、春秋の彼岸の時期を除けば、日々の昼夜の長さの差も、文字盤の入れ替えで対応するしかありません。毎日、そして毎月文字盤を調節するとなると、これは大変です。そのためやぐら時計に比べて、手間がかかります。こうしたことから、やぐら時計に比べると、あまり普及しなかったのです。　（続）

やぐら時計(左上)、二挺天符式やぐら時計(左下)と尺時計(右)
（セイコー時計資料館蔵）

平成 27 年度　柿生郷土史料館友の会　法人会員紹介

本年度の柿生郷土史料館「友の会」の法人会員の皆様をご紹介いたします。
当館の活動を支えていただき、深く感謝いたします。
今年もなにとぞよろしくお願いいたします。

平成 27 年 12 月１日現在　５８法人（順不同・敬称略）

★美容院ルシル★小料理わかば★レストラン喫茶ベル★(株)とん鈴
★(有)まつや★フラワーショップまきば★ヘアーサロン ミウラ
★禅寺丸本舗★菊川園★(株)カジノヤ★ささらプロダクション
★柿の実幼稚園★川崎青葉幼稚園★柿生保育園★柿生アルナ園★桐光学園
★和光学園★虹の里養護施設★麻生総合病院★たま日吉台病院
★誠和産業(株)★(有)栄和★プライマリー(株)
★(株)スズユウ商事★(株)北島工務店★(有)青戸建材★(有)荒川電気工事
★(有)孝友商事★杉本電気管理事務所★(株)観財★奈良工業★(有)白百合商事
★長瀬土地家屋調査士事務所★(株)三共エステート(有)
★広東商事★(有)柿生恒産★(有)朝日ホーム
★(株)ホシノ商会★リック設計企画(有)★(株)エムケープリント
★(有)麻生自動車★神奈川トヨタ自動車(株)麻生店
★(有)アクティブ★(株)ティーエムコーポレーション★(有)ステップ・オン
★栄運輸(株)★サイトー農芸★(有)志田電子製作所
★川崎信用金庫柿生支店★ＪＡセレサ川崎柿生支店★(株)飛鳥典禮
★ベリーパークフィッシュ・オン王禅寺★東急スポーツオアシス
★浄慶寺★王禅寺★常安寺★月読神社★琴平神社

柿生郷土史料館 １・２ 月催物案内　【入場無料】

◎開館日：偶数月は毎土曜日、奇数月は毎日曜日　（原則として月４回）
１月　10･17･24･31 日（毎日曜日）　**２月**　6･13･20･27 日（毎土曜日）
◎開館時間：午前１０時～午後３時　（１月３日は休館です）

第９回 特別企画展　「江戸名所図会」に見る江戸と川崎

江戸名所図会は幕末に近い天保年間に刊行された江戸並びに近郊の川崎、横浜、大宮、船橋などを含めた町の地名由来や、名所を紹介する観光案内書です。同時に寺社仏閣の由来から祭礼風俗にまで及ぶ記述は、単なる観光案内を超えた貴重な文化風俗資料になっています。

今回は初版本全巻揃いを、千代田区立日比谷図書文化館のご好意で拝借して展示いたします。

期間：10 月 31 日(土)～1 月 17 日(日)　会場：柿生郷土史料館特別展示室

ついに完成！　「身近にあった信仰の世界と人々の思い」

ふるさと柿生の記憶を DVD 化
第１弾

◆◆◆晩秋の上麻生「秋葉講」を訪ねて◆◆◆

ご希望の方にはおわけしております。詳しくは資料館までお問い合わせください。